

・ 国内編

1. 終末期の医療、終末期のケア

1.2 施設ケア

・ 国内編

1. 終末期の医療、終末期のケア

1.2 施設ケア

． 国内編

1. 終末期の医療、終末期のケア

1.2 施設ケア

No.21	
老人保健施設の看護職者の施設内死亡に対する意識	
Author(s)	梅津美香, 小野幸子
Article	老年看護学
Vol/No/page	7/1/119-127
Year	2002
<p>老人保健施設は在宅復帰に向けた中間施設という位置づけがなされているものの、近年は過程での受け入れの困難であったり、ADLの改善が期待されるほどみられず、最終的に施設内で死亡する割合が増えており、老人保健施設もターミナルケアに関らざるを得ない状況が始まっている。</p> <p>そこで、老人保健施設の看護職者の施設内死亡に対する意識を明らかにすることを目的にして、G県の老健53施設の看護職者各1名を対象にした郵送アンケート調査を行った（有効回答は29施設）。</p> <p>その結果、7施設（24.1%）が組織的なターミナルケアを行っているとは回答しており、また15施設（51.7%）がターミナルケアに取り組む上で問題や課題があるとしている。この問題としては、人手不足、看護スタッフ間の意識・意思統一が出来ていない、経済的バックアップが無い、施設外の連携が取りにくいといったものが多かった。</p> <p>これらの結果などから、中間施設としての老健施設の役割の再考が求められている現場について示された。</p>	

． 国内編

1. 終末期の医療、終末期のケア

1.2 施設ケア

No.22	
特別養護老人ホームにおける痴呆性高齢者の意思決定と医療の現状	
Author(s)	宮田裕章、白石弘巳、甲斐一郎、五十嵐禎人、松下正明
Article	日本老年医学会雑誌
Vol/No/page	41/5/528-533
Year	2004
<p>認知症高齢者など判断力に障害ある成人の入院契約に対して、成年後見人が代理することが可能となった者の、生死に関わる医療行為の選択など医療内容に関しては代理の権限を越えるものとされており、とくに入所者が単身の場合や、家族の相違が一つにまとまらない時には、医療者はどのような手続きを用いて意志決定すべきか困惑せざるを得ない事態になる。</p> <p>この問題について、特別養護老人ホームにおける実態をアンケートを用いて調査している。</p> <p>分析の結果、入所者の意向確認については、「申し出があったときに行う」とする回答が一番多く、続いて「チャンスがあれば職員の方から確認」であり、積極的な書面等の利用よりも消極的な手法が用いられていた。</p> <p>また、提供できる医療サービスについては、経管栄養、人工肛門、大腿部褥瘡等は8割の施設で行われているものの、気管切開、高カロリー輸液についてはそれぞれ2割弱であった。これはケア提供の難易によってサービスに違いがあることを示している。</p> <p>これらの知見から、とくに早期の医療内容やケア内容等の意向確認の重要性が示唆されている。</p>	

． 国内編

1. 終末期の医療、終末期のケア

1.2 施設ケア

No.23	
高齢者の終末期ケアにおける「介護者の満足度」の構造：全国訪問看護ステーション調査から	
Author(s)	樋口京子、久世淳子、森扶由彦、島田千穂、篠田道子
Article	日本在宅ケア学会誌
Vol/No/page	7/2/91-99
Year	2004
<p>終末期ケアにおける介護者の満足度は、長年にわたって培われてきた多様な価値観や家族と重要な他者との人間関係に基づくものであり、多分に主観的要素をはらむものである。そのため従来の医療従事者の作成した項目では、家族にとって重要な事柄を見逃す可能性があり、介護者の満足度の評価においては、本人・家族の希望や期待と満足度とケアプロセスとの関連を明らかにして行く必要がある。</p> <p>そこで、この研究では、協力が得られた 427 の訪問看護ステーション（全体の 14.5%）で訪問看護を受けてその後在宅療養した後に 1999 年 9～11 月に死亡した高齢者 1,305 名を対象に質問紙による調査と訪問看護師が記述した死別直後の介護者の発言内容の内容分析を行っている。</p> <p>その結果、「介護者の満足度」は、（1）高齢者本人の満足度をある程度反映すると思われる要素と、（2）介護者自身の介護への評価と、介護者の死別の準備に関する要素からなることを示している。</p> <p>このことから、高齢者の慢性疾患の特徴を踏まえた予後説明の必要性、安定期からの看取りの準備を家族それぞれが調整できるように支援する必要性、死期の予防能力を高めることで最後の心の交流が得られる時間を共有できるように専門家がサポートする必要性、が提案されている。</p>	

． 国内編

1. 終末期の医療、終末期のケア

1.2 施設ケア

No.24	
都市部介護老人保健施設における終末期ケアについての意識調査：看護職と介護職の比較	
Author(s)	織井優貴子
Article	老年看護学
Vol/No/page	10/2/85-91
Year	2006
<p>介護老人保健施設（以下、老健）は、家庭復帰を目指すための中間施設として位置づけられているが、近年は家庭復帰が減少し、老健内死亡の割合が増加傾向にある。そのため、老健内における終末期ケアの必要性が実態調査から示されているものの、趣旨に反する、人手不足などの理由から積極的ではない施設も多い。</p> <p>これらの先行する実態調査は管理職へのものであるため、現場で働く看護職、介護職がどのような意識を持っているか、職種間の違いは何かを調査している。対象はA県都市部の13介護老人保健施設で働く看護職、介護職である。老健での終末期ケアの必要性については、看護職で52.8%、介護職で48.3%がその必要性を感じており、職種間に差は見られなかった。</p> <p>また、職種間で差があった項目としては、「バイタルサインの測定」「苦痛の緩和」「コミュニケーション」「環境整備」などであった。</p> <p>これらの違いの要因としては、異なる教育背景が想定されるとしており、老健施設で終末期ケアを行うためには看護職、介護職双方の認識の差異を埋めてゆくような教育が求められるとしている。</p>	

・ 国内編

1. 終末期の医療、終末期のケア

1.2 施設ケア

No.25	
終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者の QOL とその関連要因	
Author(s)	流石ゆり子、伊藤康児
Article	老年看護学
Vol/No/page	12/1/87-93
Year	2007
<p>今後、終末期を介護保険施設やグループホームで過ごす高齢者の増加が見込まれる中で、終の棲家としての介護老人福祉施設が期待されている。</p> <p>そこで、この研究では、終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者の QOL とその関連要因について明らかにするために、施設で最後を迎えることを本人または家族が希望している後期高齢者 210 名への構造化面接調査（アンケート）を行っている。</p> <p>分析の結果、先行研究に比べて、施設で暮らす後期高齢者は「生きることは大変厳しい」「年を取って前より役に立たなくなったと思う」割合が 77.6%、76.6% と高率であった。</p> <p>また、家族や親族の存在や同僚に実際的な支援を行っているもので生活満足度が高い傾向にあり、家族や友人、とくに子どもとの面会に生きがいや張りを感じる事が示されている。</p> <p>また、施設内で他者との交流にはあまり喜びを感じておらず、施設での生活に折り合いをつけている傾向が示されている。</p>	